



北東へと伸びる錆び付いた線路の上を、電車はガタゴトと音を立てながら進んでいた。遠くの空に見える鱗雲は沈みゆく夕陽の紅に染まり、ずっと眺めていたいと思うほどに美しい。

ゆっくりと流れる街の風景。絶えず上下しているように映る電線。その上を、電車と競争するようにして鴉が一羽飛んでいたが、ずっと軌道を変えて闇へと吸い込まれていった。私はつい先ほど明かりが灯った車内に視線を戻し、再び例の家族に目をやった。

しばらく前から、私の真向かいには家族と思しき三人が横一列に並んで座っていた。車両には彼らと私以外に乗客はいなかった。左から母、子、父という順に位置する彼らは、マクドナルドの紙袋を各々の膝の上に乗せ、言葉を交わすことなく、ただ自らの食欲を満たす作業に没頭している。ハンバーガーを齧ってはドリンクに手を伸ばし、それを一飲みした後にポテトを口に放り込む。ペースは三人とも違うものの、食べ方の教科書があるのかと疑ってしまうほど、彼らは忠実にその順番を守っていた。

ものであった。

父親の頭部は使われなくなって久しい田畑のように寒々としていて、その荒涼とした状態に覆い被さるミッキーのカチューシャはもはや悲喜劇であった。カチューシャの突起部は毛髪ではなく、頭皮に直に突き刺さっていて、涙を誘う。そのネズミの耳をオシャレだと思っているのかは定かでないが、そのため尋常でない代償——頭皮への過剰な刺激——を負っている彼の姿を、私は是非ともバリ・コレクションに出る一流のモデルに見せてやりたくなった。特に理由も無いが、彼らならこの光景に一つの有意義な解釈を与えてくれるかもしれない。

両親に挟まれる形で座る十歳ほどの少年は、幸運にも両親には似ていない。おそらく彼の魂が受け継ぐべき遺伝情報を拒絶したのだろう。その証拠に、彼はくまのプーさんのカチューシャを装着していた。潜在意識がネズミのDNAを避けたに違いない。その調子だ、少年。情けない親を反面教師に、君だけは立派な大人になるんだ。私は珍しくも心の中で強くそう願った。しかし、それも束の間、少年は私の祈りを嘲うかのように、フライドポテトの油でギトギトになった指先を座席のクッションに擦り付け始めた。顔には一片の罪悪感も浮かんでおらず、淡々としている。私と目が合っても尚、無邪気に微笑んでいる。確信犯だ。蛙の子は、やはり蛙なのであろうか……。私の魂は一瞬にして地に墮ち、千々に霧散してしまった。この少年は自分の幼さを盾とし、大人の目に映る自らのいじらしさと愛らし

それ以上に興味深いことに、彼らの頭にはそれぞれデイズニールランドで購入したと思われる、あのカチューシャが装着されていた。JR舞浜駅周辺なら理解に苦しむことも無かったことだろう。しかし、そこから遠く離れたこの場所で、デイズニールマジックに掛かっている彼らの姿は果てしなく場違いであり、良識を持つ者の価値観にただならぬ揺さぶりをかけるのであった。

ミニーちゃんの、赤いリボンが付いたカチューシャをしている母親は、何度もダイエットに挑戦しつつも毎回失敗に終わっていたいそうな、決断力に欠ける顔をしている。年の割には幾分か少女趣味な、安っぽいフリルのついたパステル・グリーンのスカートが痛々しく、そこから生えるように覗くムチムチとした足はいかにも不健康そうだ。髪の毛は艶を失い、手入れを怠っているのか、毛の中段を境に色が二分している。少しでも自分を美しく見せたいという心意気は感じるのだが、そのちぐはぐなファッションセンスと中途半端な虚栄心は夫への奉仕というよりも、むしろ未熟な性欲の発露を匂わせた。いずれにしても、その姿は傍目で見ると微弱な眩暈をもたらすには十分な

さを武器にしていた。それは弱い動物が身に付ける処世術であり、頭ではなく肌で学んだ実践哲学であった。大人が子どもに対して抱くほんの僅かな油断や隙に瞬時に飛び込み、権力関係の転覆を目論む狡猾さでもある。

私はもう一度車窓の外に視線を移し、しばし遠くを眺めた。世界はすっかり闇に包まれており、民家の明かりが散りばめられた硝子細工のように点々と輝いている。それは漆黒の夜空に広がる星々を思わせて幻想的であった。ふう、と、私は溜め息をつく。向かいに座る家族がこの国の核家族の縮図なのかと思うと、心細く、今にも咽び泣きそうな思いに駆られた。例えば彼らが平均以下の人間であったとしても、私と同じ人間であることに変わりはない。その事実が、そこはかとなく悲しかった。

いや、そうではない、と私は思ってもみる。突飛だが、完全に否定することもできない一つの仮説を私は打ち立てた。彼らは、この家族は、人間ではないと考えてみたらどうだろう。彼らの醸し出す面妖な雰囲気は、どこがというのではなく、どこもかしこも普通ではない。異様だ。つまり、彼らは人間ではない——何者かだ。あのカチューシャにしても実のところ、特定の信号を受信するアンテナの役割を果たしているのではないだろうか。彼らを見たときに感じるピントのズレのような感覚は、おそらくは地球外生命体特有のものなのだろう。

夜景を眺めながら空想に耽っていると、電車が数回、左右に大きく揺れた。私は体の均衡を保とうと窓の枠に掴まった。揺

れが収まり、髪を掻き上げようと手を伸ばす。その手に、こつんと、無機質な何かが当たった。恐る恐る、私は自分の頭に乗っているモノの形を、震える指先で確かめてみた。ゆっくりと、丁寧に。両耳から頭頂部にかけてのフィット感。アンテナのように突き出した、二つのソフトな円形部。それは間違いない、カチューシャであった。その時の私の戦慄、背筋の凍る思いといえば、脊髄に水銀を流し込まれる以上のものがあつた。そんなはずはない。そう思いながら、私は家族の方に目を向けた。するとあろうことか、彼らの頭に乗っていたはずのカチューシヤは既に無く、膝の上に乗っていたはずのマクドナルドの紙袋も消えていた。彼らは一様に、訝しがるような目でまざざと私を見ていた。

ふと、私は自分の膝の上に一定の重みと温かみを感じた。恐怖心から、視線をそこに向けることはなかったが、それが何であるのか、私には予測がついていた。それがいつからそこに乗っているのかはわからない。何も思い出すことはできなかった。記憶がすっぱりと盗まれてしまつて、時間だけが残されてしまつたかのようだ。答えが降つて湧くような気配もなく、ただ電車が連結点を跨ぐ振動が太腿に響くだけであつた。

唐突に、私は自分のカチューシヤがどのキャラクターのものであるのかが知りたくなつた。気が動転していたせいもあるだろう。それを知つたところで事態は何ら変わらないこともわかつていた。しかし、そのキャラクターを知ることが私の置かれた

た状況を読み解く一つのヒントになるかもしれない。私はそう推測したのであつた。静かに意を決し、カチューシヤに手を伸ばした。そうして、それを外そうと、右腕に力を込めた。

しかし、どうしたことか、そのカチューシヤはびくりとも動かず、まるでボルトで固定されているかのようにしっかりと私の頭から離れない。そんなバカな。私は叫びたくなつた。しかしその思いを喉の先端で抑えた。叫んだところで問題が解決することも無い。それ以前に、良識のある人間は電車の中で叫んだりはいしない。そして私は良識のある人間だ。深呼吸を三回ほどして、心を落ち着かせた。実際に心は落ち着くことは無かつたが、幾分か物事を秩序立てて考えられるようになった。私は膝の上に乗っている袋をしっかりと見た。案の定、それはマクドナルドの紙袋だつた。中身を確認する前に、私はどうしても自分のキャラクターを確認しておかねばならなかつた。紙袋を横の座席に置き、私は呼吸を整えた。

腰を少し浮かし、家族の背後にある電車の窓ガラスに自分の姿を映してみた。頭の角度をずらしたりしながら、念入りに確認をする。カチューシヤに付いた耳は、ネズミでもクマでもなく、アヒルでもイヌでもネコでもなかつた。それは、どうやらリスのものであつた。チップとデール……だつたらうか。確か高音で素早く話す、そんなキャラクターがいたはずだ。しかし、いずれにせよ、私には自分のカチューシヤがそのどちらのものなのかはわからなかつた。意に反して、謎は一層深まる形とな

つた。

力無く座席に腰を下ろし、例の家族に目を向けた。彼らは三人とも笑いを押し殺したような顔で、盗み盗みこちらを見ていた。その態度は苛立たしく、癪に障るものだつた。マクドナルドの袋を投げつけてやろうかとも思ったが、その場合、私が狂人に仕立て上げられる可能性が極めて高い。そうであつてはならない。成す術を無くして、私は傍にぼつんと置かれたマクドナルドの紙袋を手を取つた。

袋の中身は、いわゆるハッピーセットだつた。ハンバーガーとオレンジジュース、フライドポテト、そして期間ごとに変わるおもちゃが一つになつた、子ども向けのセットだ。ハッピーセットを手にしたのは、何年ぶりだろうか。ひどく昔のことのように思われる。私はおもちゃを取り出し、ビニール袋を破つた。電車のおもちゃだつた。思いの外精巧に造られていて、細部までしっかりと再現されている。車窓の中がキラリと光つたような気がして、私は内側を覗き込むように顔を近づけた。小さな電車の座席には、手に何かを持ってそれを注意深く見詰める、カチューシヤを装着した男がいた。